(1) テーマ／目的

尖閣諸島問題を端として日中関係に緊張が増しているが、その中国の主張の根底に流れる考え方と背景について理解する。

(2) 日時・場所

平成 22 年 10 月 8 日 14:00～ 東京 国立国会図書館

(3) 主催

国立国会図書館 調査及び立法考査局

(4) 基調講演講師及びパネリスト

講師：金 燦栄 氏 (中国人民大学国際関係学院副院長)

パネリスト：津上俊哉 氏 (東亜キャピタル株式会社代表取締役)

高原明生 氏 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)

鎌田文彦 氏 (国立国会図書館調査及び立法考査局外交防衛調査室主幹)

(5) 基調講演：金 燦栄氏発言要旨

(A) はじめに

21 世紀の最初の 10 年は、世界が総体的に安定しながらもその裏では本質的な構造変化が見られた形で終わった。この構造変化とは世界の権力と経済力が近代以降初めて西側（アメリカ、EU、日本等）から非西側（中国をはじめとする BRICs 諸国など）世界へ移転するという歴史的な状況が出現し、中国は急激な発展を遂げ、現行の国際秩序への発言力が大きくなったことである。新しい歴史の起点に立ち今後 10 年の世界と中国を考えることは、世界の変化の傾向と中国の勃興に関する未来の姿を理解する上で大きな手掛かりとなり、中国の現在の政策と戦略を把握する際にも示唆を与えてくれるものとなる。

(B) 今後の世界の基本的な方向

世界は急速にポスト金融危機時代（リーマンショック後の世界）に入ってきている。西側陣営と非西側陣営の対比は今とこれからの国際構造を理解する上で注目すべき変化である。冷戦終結後、アメリカをリーダーとする西側陣営はあらゆる点で世界をリードしてきたがわずかに 20 年でその地位は揺らいできている。これからの 10 年の国際権力構造は西側と新興市場経済諸国、ロシア、イスラム世界とが均衡を保つ状況になる。西側、非西側のそれぞれを展望すると。。。

西側：それぞれの国で問題を抱え世界を主導する総合的な能力は低下する。しかし、西側でのアメリカの地位はさらに強固なものになる。

非西側：各国内部にはそれぞれ問題はあるも高い経済成長を続けポスト金融危機時代の世界経済成長の新しい原動力となりその政治的・経済的地位は高まる。

(C) 今後の中国の発展形勢

現在中国の国力は GDP の側面のみではなく、全面的、実質的に上昇している。これからの 10 年も急速な成長を維持し総合的な実力はアメリカに次ぎ世界第 2 位となると考える。

経済面では工業化の中期的段階にあり、引き続き現代化を推進することが重要な課題である。軍事面では、台湾問題、チベット独立運動など、国の安全と領土保全の問題や「走出去」(*1)により増大する海外利益の保護のため、また外からの脅威に対する積極的な防御戦略として国防を近代化、増強するだろう。同時にソフトパワー(*2)の構築が国家の全体発展戦略と外交戦略にとって重要となり、政府もこのことを十分理解しているようである。国内的には貧富の差、環境悪化などの内部矛盾が激化し発展のための条件が複雑化する時期となるが中国の今後の成長はその解決如何にかかっていると考える。国内問題の解決と外国の中国による侵略への懸念を払しょくするために、戦略的には「韜光養晦」(とうこうようかい:*3)を、戦術的には「有所作為」(*3)という外交の二面性を保つことになろう。大局としては開放、協力、互惠を維持するが中国の核心的利益と領土に関する問題についてはそれに固執する形となろう。

(D) 中国と世界との関係の再構築

中国と世界が本当の意味で戦略的互惠関係を築くためには、中国も外部世界もイデオロギーと具体的な政策を調整し理性的で現実的な枠組みを構築すべきである。外部世界は多種多様化するグローバルな体系の重要な一員として中国を受け入れることが重要であり、中国は国力に応じた責任を引き受けることが必要と考える。中国は国内優先の戦略の下で国家利益と国際責任、自国の発展とウィン-ウィンとの間でバランスと柔軟性を示し、中国と世界の間を平和、協力の方向に推し進めることが必要である。

*1：走出去＝中華人民共和国が積極的に支持している海外の投資戦略のことである。多くの国々が外国からの資本受け入れに躍起になり、海外への投資に消極的であるのに対し、中国は外資導入と海外への投資拡大に積極的である   *2：ソフトパワー＝国家が軍事力や経済力などの対外的な強制力によらず、その国の有する文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解、共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力のことである   *3：韜光養晦 有所作為＝鄧小平の唱えた中国の外交姿勢で能力を隠し好機を待つが為すべきことは為すという意味

(6) 津上俊哉氏発言要旨

(A) 国力の上昇と国民の認識のギャップ

年来の高度成長、特に世界金融危機後の2年間において中国の「一枝独秀」(目立って秀でていること)と、それに対比しての欧米の退潮というコントラストが起きた結果、中国の国際的地位は顕著に向上したというのは実感できる事実である。中国人の自信が回復、自己肯定的な国家観も徐々にではあるが強まってきている中、過去に顕著だった「遅れてダメな国」という否定的な劣等感がとくに80年代以降生まれの若者において希薄化している。しかし他方で貧富、地域格差、環境問題、住宅難などの難題が山積みし「超大国」「G2(米中)」の実力はないとの認識が圧倒的多数である。事実、環球時報紙が行った世論調査でも「中国は世界的な強国か？」の問いに対して「全く違う」58.4%、「違う」25.7%という結果が出ている。また、海外のG2論についても「美名でおだてて中国に過重な責任を負わせようとする西側の策略」とみている。しかし、海外では「かくも裕福で強大になった中国」のイメージが日増しに強まっており、中国国民の認識とのギャップは広がるばかりで、これが「大国の責任のありか」を巡る摩擦の温床となっている。

(B) 警戒感と猜疑心に満ちた国際関係観

中国国民には国際社会と言うものは弱肉強食で、西側先進国に都合よく途上国には不利、不公平に運営されている。また、これらの国々は少しでも隙を見れば中国に付け入ろうとする油断ならぬ連中であるという警戒心と猜疑心に満ちた認識が支配的である。この外国観は変わっておらず、国が弱く分裂していたせいで列強の侵略を受け虐められたという歴史的なトラウマは未だ風化せず根強く生きている。

西側諸国が「中国台頭」を認めたといってもその西側の中国観は偏見と二枚舌に基づいており中国を正当・公平に評価していないという不満も見られる。

(C) 韜光養晦論 VS 核心利益論

鄧小平は外交姿勢について「韜光養晦」、つまり中華復興には依然長い年月が必要でありそれまでは目立たないよう力を蓄えよという戒めを残した。これが20年に渡り中国の外交上のコンセンサスであったが、自国に対する自信、自己肯定的な国家観の高まりにつれて「韜光養晦」路線の見直し論が急速に浸透してきている。このような機運を背景に「有所作為」（為すべき時には為すべきことをいかにしても成し遂げる）へ結び付く「核心利益」論が台頭、核心利益、つまり中国が譲れない問題の範囲としては台湾など領土問題、東海、南シナ海の広大な海洋権益全体が「核心利益」として格上げされている。

本年9月23日、温家宝総理の国連演説の中では「中国は有効を重んずる一方で原則も重んずる。国家の核心利益を揺るぎなく守っていく。主権、統一そして領土保全の問題について中国は決して譲歩も妥協もしない。」と公式の場で正式に「核心利益」について言及した。また、決して譲歩・妥協しないと行った強い言葉を用いたのは初めてであり、核心利益論が中国政府の公式見解となった。

(D) 東アジアの課題

摩擦、紛争を回避するために必要なのは当事国双方の相互理解と相互尊重である。日本を含む周辺国は中国を理解し敬意を払う必要がある。他方、中国が歴史的トラウマの呪縛から逃れられず、そこから対称に形成される対外強硬路線（有所作為）を温存しながら超大国化することは疑いなく東アジア地域を不安定化をもたらす。いまや世界第二位の大国にまで復興した中国は歴史的なトラウマを癒し、清算する時期に来ているのではと考える。

（以降のパネラーの発言には前二者との重複も多く、また基調講演者の金氏への質問という形式であったこと、また、これらの質問に対し金氏が明確な回答を提示していなかったため割愛する。）

(7) 所感

尖閣諸島問題や他地域で摩擦が起きている領土問題においてなぜ中国があそこまで先鋭的に外交を進めるのか、その歴史的な背景を学んだ。長い歴史に裏打ちされた問題であるだけにその根は深く解決には時間と労力がかかるものであるという印象を受けた。一党独裁による情報統制もその大きな理由となると考えるが中国国民には中国がもはや途上国ではなくアメリカと並ぶ超大国に位置するという認識はない。中国国民ははやくこのことを認識しつつ大国としての負担を担うことにより事態の解決は見られるのであろう。パネラーの高原氏はかつてアメリカ、キッシンジャー氏が日本の軍事大国化を予測し警鐘をならしたが、事実日本はそうならず平和国家としての道を歩んだ。日本が海外の権益を軍事力で守ろうとしなかったことは近隣諸国に安心と利益をもたらした。いま、なぜ中国は日本と同じ平和発展の道を歩もうとしないのか？と述べている。私は日本の国力の増大はまさしく、ソフトパワー、つまり日本人のたち振る舞いや文化、生活とそれらに対する諸外国の敬意に起因することが大きかったと考える。中国においてもこのソフトパワーの増大も目指す展開を心から望みたい。